

ことばの点滴

188

熊本大保健センター長

藤瀬昇さんに聞く

日本独自の神経症の治療法、「森田療法」が誕生して今年で100年。創始者の森田正馬(1874~1938年)は、実は旧制第五高等学校(熊本大)の出身です。熊本大保健センター長の藤瀬昇教授らは昨年末、森田や五高出身者の足跡をたどる『森田療法と熊本五高』を出版、貴重な記録となっています。(高本文明)

出版に至った経緯は。

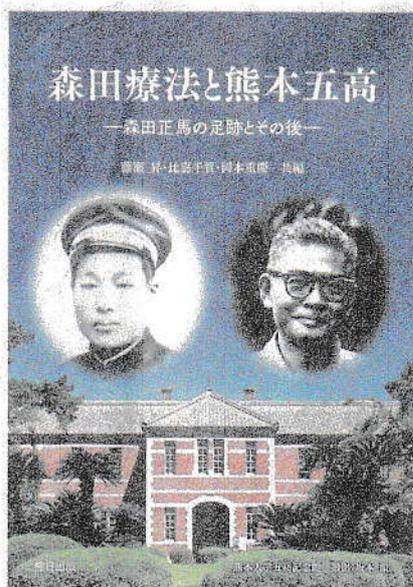
「森田先生が五高出身という縁から、2017年11月に熊本大で第35回日本森田療法学会を開催し、私が大会長を務めました。これを機に、森田先生の足跡を広く知ってもらおうと、ゆかりの人物ら11人が執筆しました」

森田はどんな人物でしたか。

「高知県に生まれ、土佐中学を経て1895(明治28)〜98年にかけて五高・三部(医科)に在籍し、精神医学を志しました。東京帝国大学(東京大)医学部を卒業後、1919(大正8)年に森田療法を創始し、東京慈恵会医科大学の教授になりました」

「個人の名前を冠した確たる精神療法は他になく、森田先生は精神科医療のカリスマです。西洋の精神分析、東洋の森田療法と形容されることもあるほどです」

森田療法の対象は。



「森田療法と熊本五高―森田正馬の足跡とその後―」(熊日出版、168頁、1296円)。写真左は森田正馬、右は水谷啓二

五高出身者が創始し100年

神経症の森田療法



◇ふじせのぼる 佐賀県出身熊本大大学院医学研究科修了。2016年から熊本大保健センター教授、17年から現職。精神保健指定医、熊本大病院非常勤診療医師。日本精神神経学会専門医、代議員。日本老年精神医学会専門医。54歳。

「主に不安や葛藤がベースにある神経症が対象です。強迫性障害やパニック障害、社交不安症などです。神経症は、本来どうしようもないことにすくもつかわれ、症状を悪化させてしまいます。そのメカニズムについて患者さんと話し合いながら、不安を『あるがままに』受け入れてもらう。そうした発想の転換が治療の根底にあります。かつては入院治療でしたが、現在は外来が中心で投薬も併用されます。メンタルヘルスの分野でも活用されています」

「森田先生は幼い頃、寺の地獄絵図を見て、恐怖におののき、神経症、パニック障害を抱えていました。五高時代は比較的落ち着いていましたが、東京帝大時代に再発。どんな症状でも耐える覚悟して勉強に打ち込んだところ、発作は起きず、あるがままに受け入れる姿勢の大切さを悟り、森田療法を生み出すきっかけになりました」

「森田先生は幼い頃、寺の地獄絵図を見て、恐怖におののき、神経症、パニック障害を抱えていました。五高時代は比較的落ち着いていましたが、東京帝大時代に再発。どんな症状でも耐える覚悟して勉強に打ち込んだところ、発作は起きず、あるがままに受け入れる姿勢の大切さを悟り、森田療法を生み出すきっかけになりました」

「水谷氏の長女、比嘉千賀さんは、さいたま市の精神科クリニック院長です。京都森田療法研究所主宰で精神科医の岡本重慶さんと私の3人が今回共同編者を務めました。資料を調べていく中で、森田先生が住んでいた下宿が薬園町にあったと特定できました」

五高の英語教師だった夏目漱石との接点がありましたか。

「漱石は森田先生の入学から半年後に赴任し、同郷で後輩の寺田寅彦も1年後に入学しました。残念ながら森田先生と漱石との交流の記録は見つかっていませんが、3人が一緒に黒髪のでっこしていたと思うとロマンを感じます。興味を持たれた方は、ぜひ本をご覧ください」

「森田療法の最大の特徴は、当事者による自助グループである『NPO法人・生活の発見会』が、